



# 一般教育演習 (フレッシュマンセミナー)

## グローバル・キャリア・デザインⅢ

第22回ファースト・ステップ・プログラム(FSP)北米

全体報告書

2018.02.14～02.26



## 目次

1. 「一般教育演習(フレッシュマンセミナー):グローバル・キャリア・デザイン」  
通称:ファースト・ステップ・プログラム(FSP)とは p.3
2. 参加メンバー紹介 p.4
3. 日程表 p.6
4. 事前授業【海外研修前】 p.7
5. 事後授業【海外研修後】 p.8
6. 企業等及び協定大学訪問【海外研修中】 p.9
  - ・ビル&メリンダ・ゲイツ財団ビジターセンター様
  - ・日本航空株式会社様  
(米州技術・品質保証部 部長 桂田健様、マネジャー 近藤信之様、  
アシスタントマネージャー 浅野剛生様、アシスタントアドミニストレーション 原田美紀様)
  - ・在シアトル日本国総領事館様  
(領事 早坂直樹様、Education/JET Program Advisor 柳本洋子様)
  - ・LegitScript 様  
(アジア政策・執行部長 岡沢宏美様)
  - ・ポートランド州立大学経済学部様  
(学部長・教授 伊藤宏之様)
  - ・東京応化工業株式会社アメリカ本社様  
(General Manager 室井雅昭様、Project Coordinator Ms. Sayo Duberow,  
Inspection Department Manager Mr.Christopher Bell, Manufacturing Division Deputy  
General Manager 兼 Manufacturing Department Manager Mr. Ivan Morales,  
Legal Affairs Department Manager 土屋隆一郎様)
  - ・オレゴン日系レガシーセンター様  
(Ms. Hiroko Stacey)
  - ・University of Washington  
(Ms. Ellen Frierson, Manager of Foundation Programs, FIUTS)
  - ・Portland State University  
(Mr. Paul Braun, Program Manager, International Special Program)
  - ・シアトル若手勉強会様  
(ご講演者 NICHIREI U.S.A. , LCC 佐藤健夫社長)
  - ・ポートランド日本語継承学校様

7. 参加者の声	p.21
8. 終わりに	p.24
9. 謝辞	p.24
10.編集後記	p.25

## 1. 「一般教育演習(フレッシュマンセミナー):グローバル・キャリア・デザイン」

### 通称:ファースト・ステップ・プログラム(FSP)とは

全学教育科目のひとつ、「一般教育演習(フレッシュマンセミナー):グローバル・キャリア・デザイン」は、海外協定校等の教育機関での授業体験や学生との交流、国際機関や国際的に展開している企業の現場見学、及び海外で勤務する方々との対話などを短期間に体験する機会を提供します。このプログラムは、学生にとって交換留学、語学研修、国際インターンシップやボランティア等、本学内外で実施される様々な海外プログラムに挑戦する最初の一步となることを目的としています。科目を開発する段階では、海外に向けての第一歩という意味を込めて、「ファースト・ステップ・プログラム」という名称を使っていたので、現在、通称を「FSP」としています。

プログラム参加を通して、学生がグローバルなキャリアについての視野を広げ、計画性をもって、将来的にグローバルだけでなく、日本の国内でも活躍するような「グローバル」な人財として育てていくようになることを目指しています。[HP(北大生のための留学ガイド)より抜粋]

【以下、本授業科目をFSP、今回のプログラムを第22回FSP北米とします。】

### ○応募資格

- ・ 北海道大学に在籍する原則学部1, 2年生
- ・ 留学や国際協力、国際交流等に高い関心をもっている学生
- ・ 協定大学等との学生交流や講義受講に必要な基本的な英語能力を有する学生  
(TOEIC 400点、TOEFL iBT 41点、TOEFL ITP 437点、英検準2級、国連英検C級以上の英語力を必要とします)
- ・ 海外留学経験のない、または少ない学生を優先
- ・ 他の参加者と協調して主体的にプログラムに参加する意思をもっている学生
- ・ 原則、事前授業(5回程度)及び事後授業(3回程度)を必ず受講できる学生
- ・ 原則、北海道大学での在学期間中及び卒業後も、本プログラムの評価や広報活動に積極的に協力できる学生
- ・ 訪問国での活動に心身ともに支障がない学生  
[HP(北大生のための留学ガイド)より抜粋]

### ○第22回FSP北米概要

海外研修期間:2018年2月14日(水)~2月26日(月)

渡航先:アメリカ合衆国(シアトル、ポートランド)

参加費用:32万円程度

【費用に含むもの】航空運賃、宿泊費、車両借り上げ代、交通費等

奨学金:日本学生支援機構(JASSO)から奨学金(8万円)が支給される可能性があります。(今回は、受給要件を満たす学生はJASSO海外留学支援制度(協定派遣)奨学金及び/または北大フロンティア基金新渡戸カレッジ奨学金の受給が可能でした。)

参加人数:16人

## 2. 参加メンバー紹介

第 22 回 FSP 北米では、参加メンバー16人が総務企画班、企業訪問班、プレゼンテーション班、記録広報班の4つの班に分かれてそれぞれの仕事を行いました。以下、班の概要とメンバーを写真とともに紹介します。

### 総務企画班

海外研修前の学習会資料の作成や教育訪問時の学生交流イベントの企画、アジアプログラムとの合同ランチ会の企画・運営などを行う班です。さまざまなイベントの企画、運営を行うため、参加メンバーをまとめる中心的な存在です。

### 企業訪問班

訪問企業様等の情報収集と学習会資料の作成、海外研修中には訪問企業様等の対応を行う班です。さらに海外研修後には訪問企業様等へのお礼状も作成するため、企業様と多くかかわることができます。

### プレゼンテーション班

海外研修中、訪問教育機関で留学先としての北海道大学(以下、北大)の魅力について英語でのプレゼンテーションを行う班です。実際に海外で英語でのプレゼンテーションを行うため、英語力を高められる機会が多くあります。

### 記録広報班

海外研修前のFSPの活動をFacebookやTwitterなどのSNSを通して発信し、研修後には全体報告書の作成、帰国報告会でのプレゼンテーションなど、FSPの広報活動を担当する班です。

#### <総務企画班>

(写真左から)

石川 梨紗

農学部1年

山本 一輝(全体サブリーダー)

理学部2年

影山 奨

教育学部1年

根塚 映見(全体リーダー)

理学部2年







<企業訪問班>

(写真左から)

油谷 珠美

法学部2年

岡本 大輝

水産学部2年

<プレゼンテーション班>

(写真左から)

千住 哲世

教育学部2年

佐藤 敦志

総合教育部理系1年

西峰 宙希

水産学部1年

山下 夏歩

総合教育部理系1年



<記録広報班>

(写真左から)

百崎 恭佳

総合教育部理系1年

三井 和

文学部1年

三井 智子

総合教育部理系1年

井上 夏緒

医学部1年

馬場 佐織

総合教育部理系1年

庄司 明日美

法学部1年



### 3. 日程表

#### 2017年度 第22回 FSP 北米 日程表

日次	日付	曜日	都市	活動内容
1	2/14	水	札幌～シアトル	新千歳空港から羽田空港へ、その後専用車で成田空港へ移動し、シアトルタコマ空港へ ビル&メリンダ・ゲイツ財団ビジターセンター様訪問
2	2/15	木	シアトル	午前 日本航空株式会社様訪問(Boeing 社様 Everett 工場内) 午後 University of Washington 訪問・活動
3	2/16	金	シアトル	午前 訪問国調査活動(*1) 午後 在シアトル日本国総領事館様訪問
4	2/17	土	シアトル	午前 訪問国調査活動(*1) 午後 シアトル若手勉強会様に参加 訪問国調査活動(*1)
5	2/18	日	シアトル～ポートランド	午前 訪問国調査活動(*1) 午後 ポートランドへ移動
6	2/19	月	ポートランド	午前 振り返りミーティング①(*2) 午後 訪問国調査活動(*1)
7	2/20	火	ポートランド	午前 LegitScript 様 午後 ポートランド州立大学経済学部様
8	2/21	水	ポートランド	午前 東京応化株式会社アメリカ本社様訪問 午後 オレゴン日系レガシーセンター様訪問
9	2/22	木	ポートランド	終日 Portland State University 訪問・活動
10	2/23	金	ポートランド	午前 Portland State University 訪問・活動 午後 振り返りミーティング②(*2)
11	2/24	土	ポートランド	午前 ポートランド日本語継承学校様訪問(希望者9名のみ) 午後または終日 訪問国調査活動(*1)
12	2/25	日	ポートランド～機中泊	ホテルからポートランド国際空港へ移動 ポートランド国際空港から日本へ向けて出発
13	2/26	月	機中泊～札幌	成田空港到着 成田空港から新千歳空港へ

\*1 訪問国調査活動: 学生が訪問国に関する独自のテーマを定め、現地でテーマに沿った調査を行う活動

\*2 振り返りミーティング: 海外研修を通じて得られた発見を参加メンバーと共有し、その後の活動に活かすために行われるミーティング

## 4. 事前授業【海外研修前】

参加メンバーの多くに海外渡航経験がないことも、FSPの特徴の1つです。そのため、他の留学プログラムと比較しても、より手厚い事前授業・事後授業が展開されており、参加メンバーは安心して初めての海外渡航に挑戦することができます。今回のFSPでは、12月半ばから1月末までに全5回の事前授業が行われ、国際連携機構国際教育研究センター 肖蘭先生、国際連携機構 石倉香理さん、同じく国際連携機構 川端千鶴さんから話をいただきながら、グローバルキャリアデザインと異文化理解についての基礎知識、メールの書き方などの社会人としてのマナー、危機管理、そして訪問先であるアメリカについて学習しました。また、この事前授業は、第4回目の授業を除き、同時開講された第23回FSPアジアプログラムと合同で行われました。



第4回目の事前授業の様子

第1回目の事前授業では、FSPでお世話になる教職員の方々の自己紹介と、FSPの概要、目的を説明いただきました。また、言葉遣いやメールの書き方など、社会人としてのマナーについて確認しました。

第2回目の事前授業では、プログラム毎に自己紹介を行い、参加メンバーの初めての交流機会となりました。その後、リーダーとサブリーダーを決めたほか、総務企画班、企業訪問班、プレゼンテーション班、記録広報班の4つの班を決定し、それぞれの班が活動を始めました。

第3回目の事前授業では、キャリアデザイン、グローバル人材、異文化コミュニケーションについて、肖蘭先生からお話をいただきました。自分のキャリアについて考えるとともに、海外研修で何に注目して学んでくるか、という手掛かりになったように感じています。

第4回目の事前授業は北米プログラムのみで行われ、副引率の2人の先生の紹介と、安全管理と危機管理についてケーススタディを行いました。参加メンバーの多くが初めての海外ということで、不安もあったかと思いますが、状況に合わせてどのように行動すべきかを改めて確認することができました。また、テーブルごとにディスカッションをしながらの授業だったため、参加メンバーと交流する良い機会にもなりました。



第5回目の事前授業の様子

第5回目の事前授業は、プレゼンテーション班が、協定大学訪問の際に北大への留学の魅力を伝えるためのプレゼンテーションの予行を行いました。その他のメンバーは、「良い聴衆とは何か」を考えながらプレゼンテーションに耳を傾け、更に良いプレゼンテーションになるようフィードバックを行いました。また、この日の授業には過去にFSPに参加した先輩方も参加してくださり、プレゼンテーションについてアドバイスをいただくことができました。

(文責:三井和)



## 5. 事後授業【海外研修後】

事後授業では、海外研修で学んだことを参加メンバーと共有し、セカンドステップについて考えました。

第1回目の事後授業は、海外研修 10 日目にポートランド州立大学にて行われました。引率の石倉さんが差し入れてくださった美味しいチョコレートを食べながら、アメリカの講義のように自由に発言し、お互いを尊重し合う雰囲気はとても心地よく感じられました。参加メンバーそれぞれがアメリカ滞在中に気がついたこと、学んだこと、そして FSP で得たこと、考えたことを共有しました。10 日間行動をともにし、同じ経験をしてきた参加メンバー同士でもその経験から考えることは人それぞれで、一緒に研修を振り返ることで、自分にはない価値観や考え方に気がつくことができました。とても充実した時間でした。



第1回目の事後授業の様子



第2回目の事後授業の様子

第2回目の事後授業では、記録広報班が帰国報告会で行うプレゼンテーションの予行とそのフィードバックを行いました。事前授業で学んだ「良い聴衆とは何か」を意識しながらプレゼンテーションに耳を傾け、よりわかりやすく伝えるために改善点を指摘しあいました。また、第5回目の事前授業と同様に、過去に FSP に参加された先輩方からもフィードバックをいただきました。授業の後半では、セカンドステップについて考えました。肖先生と川端さんからは北大が主催する他の留学プログラムや国際インターシップの紹介を、FSP の先輩からはご自身のセカンドステップ、サードステップについてお話をいただき、最後に参加メンバーそれぞれのセカンドステップに向けて、現在の

考えや計画を共有しました。同じ経験をしたにもかかわらずセカンドステップとして考えていることは様々で、多様な考えを持つ参加メンバーが集っていることは FSP の醍醐味であると改めて感じました。海外研修後に北米プログラム、アジアプログラムの両方が集まったのは初めてだったので、それぞれのプログラムが海外研修中に学んできたことを共有する良い機会となりました。事前授業のときには想像もつかなかったほど活発に意見交換をし、そしてそれを楽しんでいる様子に、お互いの成長を実感しました。

(文責:三井和)

## 6. 企業等及び協定大学訪問【海外研修中】

### ビル&メリンダ・ゲイツ財団ビジターセンター 様

ビル&メリンダ・ゲイツ財団はマイクロソフト社の創業者であるビル・ゲイツ氏と妻のメリンダ氏によって 2000 年に設立された慈善基金団体です。世界中のすべての人々が同等に健康で生産的な生活を送る機会を得ることができるよう、5つの分野(グローバル・ヘルス部門、グローバル開発部門、グローバル成長と機会部門、米国部門(アメリカにおける教育問題)、グローバル政策と支援運動部門)で活動している団体の支援をしています。(ビル&メリンダ・ゲイツ財団ホームページより)



ボランティアガイドの方の説明を受けている様子

ビル&メリンダ・ゲイツ財団ビジターセンター様では、財団が支援している事業の展示について、ボランティアガイドの方に英語で説明をしていただきました。世界にはまだ、きれいな水を手に入れるために、毎日9マイル(約15キロメートル)の距離を往復しなければならない人たちがいること、そして全世界の人口約 70 億人に対して、その 1/3 の人はトイレがない状態で生活しており、それによって寄生虫などの病気が問題となっていることなどを学びました。また、水や燃料がない場所でも利用できるトイレの展示や、色を見るだけで保存方法を把握できる薬品の表示ラベルの展示などを見て、具体的に今のような支援がなされているのか、ということの説明もしていただきました。最後の展示室には、「今自分には何ができるのか」ということを考えるアクティビティがあり、実際に今世界中でボランティア活動を行っている方々がどのような経緯でボランティアを始めることになったのかを紹介するビデオを観たり、自分の得意なことについて書き出して考えるコーナー等を体験し、自分がどのように社会に貢献できるかを考えました。

全て英語の説明や展示で理解することが難しかった点もありましたが、世界中で起こっている様々な問題について知ることができました。この訪問を機に、視野を広げて、世界の様々な国の生活の水準や衛生状態にも興味を持ち、自分ができることについて考えていきたいと思えます。

(文責: 百崎恭佳)

### 日本航空株式会社 様

米州技術・品質保証部部長 桂田健 様,

マネジャー 近藤信之 様 ,アシスタントマネジャー 浅野剛生 様,

アシスタントアドミニストレーション 原田美紀 様

日本航空株式会社様(以下 JAL 様)ではまず、Boeing 社様の Everett 工場を見学させていただきました。工場見学では Boeing 社様のツアーガイドの方、スタッフの方それぞれ 1 名と桂田様、近藤様、浅野様が工場内を案内してくださいました。この Everett 工場は容積が世界一の工場で、工場内の一番長い通路は約 1 キロにも及ぶ巨大な工場でした。Everett 工場では現在、主に Boeing747、767、777、787 の 4 種類の飛行機を扱っているそうで、私たち参加メンバーはこれらの飛行機の製造過程などを見学させていただきました。工場内は普

段見ることのできない製造中の機体がいくつもあり、その中を人やロボットが忙しそうに動き回っておりとても活気がありました。参加メンバーも終始工場の大きさと迫力に圧倒されながら見学しました。見学中にお話して下さった近藤様によると現在、工場では AI やロボットの導入を積極的に進めているそうです。今回の工場見学では実際に飛行機の製造の様子を見ることができただけでなく、自動化や仕事の可視化などといった働き方、仕事の効率化ということの現状を Boeing 社様という業界の先頭を走る大企業様の工場において垣間見ることができとても貴重な体験となりました。



桂田様、近藤様、浅野様との記念写真  
Boeing 社様の Everett 工場内にて

工場見学の後は近藤様、桂田様にそれぞれご講話いただきました。ご講話の際にはお弁当も用意していただき、ランチをとりながらご講話を拝聴しました。近藤様からは米州技術・品質保証部様の主な業務内容をご説明していただいた後、私たち参加メンバーの質疑にご回答いただきました。質疑応答の時間では、参加メンバーの質問に対して近藤様ご自身の経験などを交えながら丁寧にご回答いただきました。その中で近藤様は長年携わってこられた Boeing747 について、機体の亀裂を防ぐにはどうしたら良いかというような苦労はあったが、機体にとても愛着を持っているとおっしゃっていました。このお話を拝聴し、普段何気なく利用している飛行機というものが製造に携わる方々のご苦労や飛行機への愛があって初めて製造されているのだということを改めて実感する事ができました。



質問する参加メンバーの様子

桂田様からは学生時代からどのように現在の仕事に就く事になったのか、そして海外で働く事などについてお話していただき、その後参加メンバーから事前に提出させていただいていた質問にご回答いただきました。桂田様は工学部航空学科で学士号を取得されており、飛行機が好きだったため JAL 様に入社されたそうです。日本での勤務を経て 2014 年から現在までシアトルの米州技術・品質保証部で勤務されています。海外で働く事について桂田様は、海外で働く時には様々な人と関わり、仕事をする機会が多いため英語力をはじめとするコミュニケーション能力が非常に重要になってくるとおっしゃっていました。また、社外の様々な人と関わる機会の多い海外では社内だけに目を向けがちな日本に比べ、世界がとても広がるもおっしゃっていました。実際に海外でご活躍されている方のこのようなお話は将来海外で働くことに興味がある参加メンバーにとって特に貴重なものとなりました。さらに学生時代にやるべきことについて桂田様は、今与えられた環境で努力する事が大切だということをおっしゃっていました。このお言葉で将来のことを考えることも重要ですが、今ある環境で目の前のことを一生懸命やることによりそれがいずれ将来につながっていくのだということがわかりました。私もこのお言葉で今所属している大学や学部といった場所で目の前にあることを精一杯頑張ろう、という決意を新たにすることができました。

(文責:庄司明日美)



**在シアトル日本国総領事館 様**

**領事 早坂直樹 様**

**Education/JET Program Advisor 柳本洋子 様**

在シアトル日本国総領事館様は人と人とのつながりを広げ、課題が発生したらその解決のお手伝いをするこ  
とにより、姉妹都市等のさらなる良好な関係づくりに尽力しておられます。また、日本企業支援窓口で個別企業  
からの相談・支援要請などにも対応なさっており、日本企業の海外展開支援を進めておられます。

はじめに、Education/JET Program Advisor である  
柳本様からお話を伺いました。柳本様は海外の大学  
で国際関係学とイタリア語を学ばれた後、一度は日  
本に帰国し就職されましたが、自分の本当にしたい  
ことは何かを考え直した結果、会社を辞めヨーロッパ  
の大学院へ進学なさるといふ大きな決断をされたそう  
です。私が柳本様のように一度日本で就職が決まっ  
たとしたら、自分の本当にやりたいことがほかにあっ  
たとしても、それをあきらめて企業に勤めていたと思  
います。柳本様の意志の強さや決断力に驚くと同時  
に、私も見習わなければという思いに駆られました。  
また柳本様には、大学やお仕事で複数の国に住ん  
でこられた経験から、日本が他国から学ぶべきこと  
についてお話していただきました。その中で、日本はあまり融通が利かない印象があるというお話がありました。



早坂様との記念写真

在シアトル日本国総領事館様入り口にて

日本ではスケジュールが分刻みであり、急な変更が出たときの対応が遅れがちですが、イタリアにはフレキシ  
ブル性があるため臨機応変に対応できる力があるとのことでした。また、それに関連して早坂様からは日本人  
は相対的に発言力が弱いことがあり、他国に圧倒されることがあるとのお話もいただきました。海外で働いてお  
られる方々だからこそお気づきになったことを学ばせていただきました。

次にシアトルが位置しているワシントン州と日本の関係についてのプレゼンテーションをしていただきました。  
日本とワシントン州の貿易についてのご説明では、研修 2 日目に訪問したボーイング社様が日本の民間航空  
機市場の大きな割合を占めていることや、ワシントン州には Microsoft 様や amazon.com 様、Expedia 様など世  
界的な企業の本社があり、日本とも深いつながりがあることを教えていただきました。

その後早坂様のこれまでのご経歴や経験談を聞かせていただきました。私たちと同じく北海道大学のご出身  
で、農学部を卒業された後、農林水産省にご入省されました。2015 年に現職に就かれ、シアトルに赴任されま  
した。お話では主に、学生が社会に出る上で大事なことを教えていただきました。学生のうちにできることとし  
ては自分の得意なこと、向いていることを客観的に考え、それを生かせる仕事を探していくこと、自分の尊敬でき  
る人を探すことが大事であるとのことでした。そして尊敬できる人の良いところをまねて自分に向いている方法  
を見つけること、いろいろな方法を試してみても行き詰まったら違う角度から考え直してみることが大切であると  
おっしゃっていました。

早坂様のお話の中で心に残ったお言葉は、「自分が本当にやりたいことは自分からどんどん発信することで、  
チャンスが舞い込んでくる」というものでした。私自身、まわりの目を気にして本当にやりたいことを口にしない  
で心のなかにしまい込んでしまうことがよくあるため、これからは自分のやりたいことを積極的に発信してい  
きたいと思いました。

(文責:井上夏緒)



## LegitScript 様

### アジア政策・執行部長 岡沢宏美 様

LegitScript 様はオンライン薬局を対象にした違法販売の監視・調査業務に代表される、インターネット上の違法販売に向けた活動を行っております(ココヤクの業界ニュース <https://cocoyaku.jp/news/1/17913> より)。日本では、医薬品は本来国内で承認されたもののみを販売することができ、医師による処方箋がなければ手に入らないものもたくさんあります。しかしインターネット上では正当な薬局でも販売できない医薬品を販売しているサイトが少なくありません。さらに「簡単に稼げる! アフィリエイト」などといった副業を募集する広告を私もよく目にしますが、もしもそれが不正なアフィリエイトであった場合、その副業をすると知らないうちに犯罪に加担してしまっている危険性がある、と教えていただきました。一般の人が自分のブログに不正なアフィリエイトの広告を載せたり、実際にその副業をしたりすることは、違法会社が不当に稼いだお金をもらうことになるので、その一般の人も犯罪者になってしまいます。岡沢様は、消費者に対して①正当な情報を得る手段を学ぶこと ②上で述べた広告のような甘い言葉を見たら、その裏を考えること ③「不正行為を許してはいけない」という意識を持ち、知らないうちに「共犯者」とならないこと ④インターネット上での匿名性を過信しないこと ⑤インターネット犯罪は他人ごとだと考えないこと の4つを大切にしてほしいとお話をしてくださいました。私はそのような広告が違法会社によるものである危険性がある、ということを知ったので犯罪はこんなにも身近に存在しているということに非常に驚きました。

岡沢様は大学時代にアメリカのイリノイ大学に留学されたことをきっかけにアメリカで働きたいと思い、現在はアメリカの LegitScript 様に勤められています。留学することは当然お金のいることなので、お金がなくて困ることもあるだろうが、自分で留学するための奨学金を出してくれる制度を見つけたり、現地では教授に相談して働かせてもらったりなど自ら行動することで、お金がなくても留学する方法はある、とおっしゃっていました。



参加メンバーが質問する様子

また、岡沢様ははじめから LegitScript 様にご勤務されていたのではなく、大学で図書館情報学を勉強された後図書館で働かれました。その時にインターネット関連のアルバイトを同時にされていたことをきっかけにそのようなインターネットのジャンルの仕事もあるということを学び、当時はまだ小さな会社だった LegitScript 様に入社されました。岡沢様は、「最初から自分がこのような会社に勤めることになると考えていたわけではなく、自分がわくわくする方へ、わくわくする方へ、と選択を繰り返して来たら結果的に今の自分の立ち位置になっていた。」とお話しされました。その後、参加メンバーからそのような人生の進路選択に関して様々な質問をさせていただきました。私は何か選択をするときにそれぞれの道にはどのようなリスクがあって、どちらに行くのが自分にとって一番良いのかを考えすぎてしまい、なかなか決められないことが多く



岡沢様のご講話の様子

あります。そこで、わくわくする方を選択する、ということについて詳しく伺いました。岡沢様は、様々なリスクを考えて無難な道を選ぶのもよいけれど、現在無難に見えていることが将来もそのまま無難であるとは限らないとお話しされました。また、自分が面白いと思うことをしないのはもったいないから、自分がわくわくする方を選ぶようにしている、ともおっしゃっていました。このような岡沢様のお話をうかがって、私はいつもリスクや得られるものばかりを考えて、本当は自分は何に興味があって何がしたいのかを見失ってしまいがちであったと気づきました。自分の進路選択の仕方について深く考えるきっかけとなった、とても貴重な時間でした。

また、ご講話の最後にはガールスカウトクッキーをいただきました。このクッキーの販売は「ガールスカウト」という団体によって行われ、スーパーの前などで少女とその保護者の方が販売しています。これによって団体の資金を集めるのと同時に、お金やビジネスについて学んでいます。岡沢様はお仕事のない日にこの団体のお手伝いをされているそうです。甘くてとてもおいしいクッキーでした。ありがとうございました。このような活動も、岡沢様が楽しいと思うことを選択されているからだと感じ、自分がやりたいことを行動に移す大切さを学びました。

(文責:三井智子)

## ポートランド州立大学経済学部 様 学部長・教授 伊藤宏之 教授

伊藤教授は、マクロ経済学(国際金融)をご専門とされており、現在ポートランド州立大学経済学部の学部長、教授としてご活躍されています。雪の影響で、会場だったポートランド州立大学が午後から閉校となってしまったにもかかわらず、私たち参加メンバーが滞在するホテルまでご足労いただき、ランチをとりながら、和やかな雰囲気の中でのご講話となりました。

伊藤教授ご自身の大学生活、アメリカへの留学経験、そしてアメリカの学生の様子などを中心にお話してくださいました。また、伊藤教授がマクロ経済学を専門としていらっしゃるということで、留学やキャリアについてはもちろんのこと、国際情勢やトランプ政権、グローバル化についてなど、さまざまな質問をさせていただきました。どの質問に対しても、歴史的背景やアメリカ社会の仕組みなどの説明を交えながら、わかりやすく回答してくださいました。アメリカへの留学経験のお話のなかで、”know thyself is internationalization”という言葉を教えてくださいました。これは、「自分自身を知ることが国際化である」という意味です。伊藤教授はアメリカに留学してから、アメリカに惚れ込み日本が嫌いになる、あるいは反対に日本に惚れ込みアメリカが嫌いになる、という気持ちの変化を何度も繰り返したそうですが、それぞれの文化の背景、良いところ、悪いところを学んだ現在は、この気持ちの振れ幅が徐々に小さくなっていったとおっしゃっていました。伊藤教授が経験されたように、歴史をさかのぼり、それぞれの国についてよく知ること、そしてバランスをとることこそが、本当の意味での「国際化」なのだとわかりました。そして、そのためにはクリティカル・シンキングが大切だというお話もいただきました。クリティカル・シンキングとは、手に入れた情報



伊藤教授との記念写真

Portland University Place and Conference centerにて

に対して、本当だろうか、なぜだろうか、と疑問を持ち、建設的な議論ができるように考えることです。アメリカの学生は幼い頃から、クリティカル・シンキングをしてそれを説明する、という教育を受けますが、日本の学生はそのような学習を求められる機会が少ないため、この分野が弱いのだそうです。また、参加メンバーの海外への挑戦について、励ましの言葉もたくさんいただきました。留学や、海外で働く選択をするときに世間体が気になったり、その分だけ人生に出遅れてしまうような感覚があっても必要以上に気負うことはなく、自分がわくわくする方、一歩進むことができる方を選択して飛び込めば良いというお話は、参加メンバーの胸に強く響きました。さらに、その選択が正しいかどうかわからなくても、後から振り返ったときに正しい選択だったと思えるように行動することはできる、そしていつでも方向修正できる、という言葉も強く印象に残っています。私たちは可能性に満ちていることを忘れず、自分の人生を自分の好きなように、納得のいくように生きることが大切なのだと思います。

(文責:三井和)

### 東京応化工業株式会社アメリカ本社 様

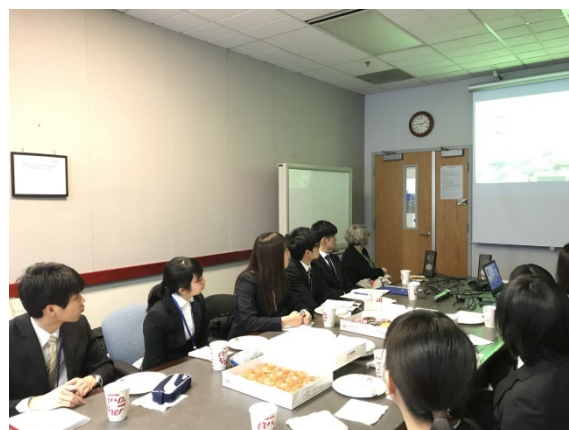
(General Manager 室井雅昭 様)

Project Coordinator Ms.Sayo Duberow, Inspection Department Manager Mr.Christopher Bell,

Manufacturing Division Deputy General Manager 兼 Manufacturing Department Manager

Mr.Ivan Morales, Legal Affairs Department Manager 土屋隆一郎 様)

東京応化工業株式会社アメリカ本社様(以下 TOK 様)は半導体の制作に欠かせないフォトレジストのトップメーカーです。フォトレジストとは高純度の化学薬品のことでありフォトレジストにより半導体に必要な超微細な回路が作り出されます。今回の訪問では工場の見学もさせて頂いたのですが、髪の毛の10万分の1といわれるナノメートル単位での正確さが求められるため工場内は厳重に管理されていました。不純物が製品に混入することは絶対に許されないため製造や検査が行われている部屋内におけるごみの量に対しても厳しい基準が設けられています。部屋の中を日本に例えると日本に500円玉が1枚落ちているだけでもいけないそうです。



TOK 様でのご講話の様子

工場を案内していただいたのは現地の方お二人で、英語だったため聞き取りや内容理解には苦労しましたが通訳もところどころしていただいたためそれぞれの部屋での仕事内容などを知ることができました。

工場見学後には TOK 様で働いておられる土屋様、Ms.Duberow、室井様からお話をいただきました。TOK 様では海外を視野に入れた研修プログラムがあり、土屋様はそのプログラムの参加者の内のおひとりです。また、土屋様は法学部のご出身で、文系の学部から理系の企業に就職する強みについてもおっしゃっており、文理にとらわれない将来のキャリア形成についての視野も広げるよい機会となりました。Ms.Duberow からはアメリカで働くということ、日本人以外の方とともに働くということについて何うことができました。社会における女性進出が進んでいるイメージが大きい米国は女性にとって働きやすい環境になっていますが日本よりも格段に進んでいるわけではなく、むしろ日本のほうが産休制度など様々な面で充実しているそうです。アメリカ人の部下を持つ立場である室井様からはアメリカならではの働き方やアメリカ人の考え方、アメリカでの部下の指





室井様、Ms. Duberow との記念写真  
TOK 様入口にて

導の仕方などについてお聞きすることができました。アメリカ人は前向き思考で、まずはやってみようという考えの方が多いため彼らの“Yes”は“出来る”ではなく“やってみる”という意味で捉えるのだそうです。

大学1, 2年生ともなるとインターン経験はほとんどなく自分自身の就職について真剣に考える機会もそう多くはありません。ましてや“働く”とはいったい何なのか、きちんとした考えを持つ学生は少ないと思います。私自身はそうでした。けれども今回 TOK 様を訪問させていただいたことで“働く”ことについて考えることができたと思います。工場見学の際に説明をさせていただいた方は「永久に品質開発は続く、そういったことにやりがいを感じる。」とおっしゃっていました。試験と違い“働く”ことには答えがありません。正しい

働き方もこの世には存在しません。ただ、試験でよい点を取るための勉強は自分自身で完結しますが、“働く”ことは一人では不可能です。他者にとってどうすることが最善なのか、どうすればよい結果になるのか、その他者である誰かのために行動することこそが“働く”ことである、と感じました。また、女性である私としては Ms. Duberow のお話が特に心に響き印象に残っています。女性であることは不利なことしかないと考えていたため、女性であることを強みにするという考え方はまさに目から鱗でした。

TOK 様からドーナツとコーヒーを用意していただき、軽食をとりながらお話を伺うというアメリカスタイルで行われ、雰囲気は和やかでしたが参加メンバー一人一人のまなざしは真剣で、各自今後の自分自身にとって指針となるようなものを得られたと思います。軽食などのお気遣い、ありがとうございました。この場を借りてお礼申し上げます。

(文責:馬場佐織)

## オレゴン日系レガシーセンター 様 Ms. Hiroko Stacey

オレゴン日系レガシーセンター様は、太平洋戦争の最中、強制収容所に送られ過酷な生活を強いられたオレゴン州の日系人の歴史を後世に伝えるための博物館です。今回の訪問では Ms. Hiroko Stacey からその歴史について説明していただきました。明治時代、仕事を求めてポートランドへ渡った日本人は、主に農業を営み日本にいる家族へ仕送りしながら生活していたそうです。1920 年代になると日本人は約 1200 人にまで増加し、日本町を形成するほどになりました。しかし、第 2 次世界大戦が勃発すると、日本人に対する差別が始まり、アメリカ政府からも立ち退き命令が出され、1 週間以内に荷物をまとめて家を手放さなくてはなりません。その後強制収容所に送られた日系人は、ただ日本人である、または親が日本人であるというだけで、周囲を有刺鉄線で囲まれ自由を奪われた状態の中で生活を送りました。アメリカには出生主義というものがあり、アメリカ



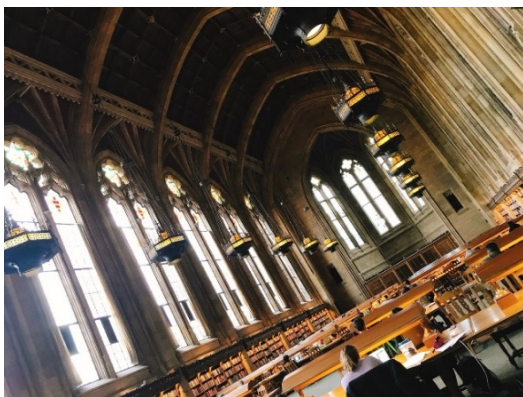


で生まれた者はみな、両親が外国人であってもアメリカ人であるとみなされます。そのため、日系 2 世、3 世と呼ばれる人たちは、アメリカ人であるはずなのになぜ自分たちだけ、他のアメリカ人とは違い収容所に入らなければならないのかという思いに苛まれたそうです。

そんな収容所から抜け出す方法はただ一つ、アメリカ軍に入隊し枢軸国側と戦うことでした。当初日系人はアメリカ人であるにもかかわらず、アメリカ軍へ入隊すら出来ませんでした。しばらくして入隊が認められるようになると、自身がアメリカ人であることを示すには戦果を上げなければならないと考えた日系人たちは、442部隊という日系アメリカ人のみで構成された部隊で凄まじい活躍をしました。しかし、442部隊が送られた場所は非常に過酷な戦場であることが多く、個々人の獲得した勲章が多い分、戦死者、負傷者の数も他部隊と比べて多かったそうです。この事実は 1990 年代になるまで明かされることはなく、日系人の功績や苦労は人々に知られずにいました。特に日本では日系人の歴史について触れる機会がほとんどないため、貴重な機会になりました。

今回の訪問で日系アメリカ人の方々の歴史について初めて知ることができ、まだまだ日本や日本人の歴史について知らないのだと痛感させられました。また、Ms. Stacey のお話の中で、3 歳の時に強制収容所に入れられた女性が、未だに家族ごとに振り分けられた番号(この番号を忘れると家族と再会できない)を覚えているということを聞き、戦争が終わってもなお戦争の面影は潜んでいるのだということにも気づかされました。このオレゴン日系レガシーセンター様の訪問をきっかけに、日本という国の歴史を学ぶと同時に、日本人の歴史にも目を向けていきたいと思いました。

(文責:井上夏緒)



スザロ図書館内の様子

#### ワシントン大学 University of Washington (以下 UW)

北大の協定校の一つであるワシントン大学を訪問させていただきました。最初に Manager of Foundation Programs の Ms. Ellen Frierson から UW の学生生活について、UW にある国際交流支援機関の Foundation for International Understanding Through Students(以下 FIUTS)についての説明をしていただきました。FIUTS は UW の留学生が、現地学生や教授、地域の人々と交流し、互いの文化を分かち合うためのイベントを企画し、留学生生活をよりよいものにしていくとする機関です。Ms. Ellen Frierson からのプレゼンテーションの後は FIUTS の学生による UW のキャンパスツアーに参加しました。UW は 1861 年に創立された歴史ある大学であり、

構内の建物は非常に趣深いものばかりで、UW のキャンパスだけ周りの街とは隔離された別世界のように感じられました。特にスザロ図書館は、ハリーポッターの世界を彷彿とさせるような荘厳な内装で、人気の観光スポットにもなっています。また大学構内には桜の名所があり、春になると満開の桜が見られるそうですが、残念ながら私たちが訪問したのは 2 月だったため桜は咲いていませんでした。

キャンパスツアー後の学生交流では、プレゼンテーション班のメンバーが UW の学生に向けて、留学先としての北大の魅力をアピールするプレゼンテーションを行いました。交流会ではそれぞれの学生生活について、独自の文化についてなど、会話が盛り上がり、連絡先を交換してさらに親睦を深めたメンバーもいました。またプログラムの中には含まれていませんでしたが、学生交流の翌日、UW の JSA(Japanese Student Association)と

いう学生団体が主催する Curry Night というイベントに参加させていただき、さらに多くの学生と交流することができました。特に印象に残ったのは、UW の学生たちは日本のアニメや漫画、アイドルグループなどのサブカルチャーについてとても詳しくということでした。中には日本のアニメやアイドルが好きということから日本に興味を持ち、日本語を学んだり、日本人と交流できるイベントに参加したりしている学生もいました。私も好奇心を大切に、好きなこと、興味のあることはとことん追求するという姿勢を見習いたいと思いました。



UW 訪問の最後には、大学構内にある学生寮に案内していただきました。そこでは実際に寮生の部屋を見せていただき、等身大の学生生活に触れることが出来ました。学生寮はほとんどが2人部屋で、それぞれのこだわりが詰まったすてきな部屋ばかりでした。そして学生寮では総務企画班の主導による交流会を行わせていただき、寮生と折り紙をして楽しく過ごしました。寮生の中には日本語を学んでいる学生もおり、「やばい」、「うける」などの日本人の若者言葉を知っている学生もおり、とても驚かされました。

### プレゼンテーションの様子

今回の訪問ではアメリカの学生たちの生活を肌で感じ、自分の留学についても具体的なイメージを持つことができました。また海外の学生とも仲良くなることができ、自身のコミュニティーを広げる機会にもなりました。

(文責:井上夏緒)

## ポートランド州立大学(以下 PSU)

PSU は、1946 年に設立されたヴァンポート・エクステーション・センター(第二次世界大戦後の退役軍人向け教育機関)を起源とし、移転を繰り返した後、1955 年にポートランド州立大学と改名され、4年制の大学となりました。「知識を街に役立たせよ」を教育理念としており、多くの PSU 卒業生がポートランドの街作りにかかわっているのだそうです。ポートランド市と札幌市が姉妹都市であること、さらに北大の最初の協定校でもあることから、PSU は北大と縁の深い大学と言えます。PSU では、二日間にわたって活動しました。



学生交流の様子 ①

1 日目は、今回第22回 FSP 北米の訪問をコーディネートしてくださった Mr.Paul Braun より PSU について簡単な説明を受けた後、PSU の学生にキャンパスを案内してもらいました。各施設が歩道橋や地下道で繋がっていたり、構内にゲームセンターがあったり、参加メンバーは終始驚かされることになりました。さらに、コンピューターや自習スペースの数、図書館内の設備など、日本の大学よりも学習する環境が整えられており、充実しているという印象を受けました。午後からは、大学院研究顧問兼学生支援コーディネーターの Ms.Karen Popp に、アメリカの大学院への進学についてお話をいただきました。実際に PSU の大学

院に進学するときに必要な書類やスコアから、得られる奨学金、学生生活にわたるまで幅広く教えていた

だき、アメリカの大学院への進学という、今まで見ていなかった選択肢が新しく増えたような気がしています。その後は、PSU で日本語を履修している学生と、折り紙やフリートークを通して交流しました。私のテーブルでは、好きな映画や歌手の話題で会話が弾みました。また、日本語でコミュニケーションをとろうとする現地の学生の積極的な姿勢には、参加メンバーも大いに刺激を受けました。参加メンバーは英語で、現地の学生は日本語で、お互い上手には話せないかもしれないけれど、どうにか伝えたい、理解したいという思いが通じ合って、コミュニケーションをとるとはこのようなことを言うのだろうか、と考えさせられました。北大への留学についてのプレゼンテーションも和やかな雰囲気の中で行われました。発表後には現地の学生から北大への留学プログラムの詳細についての質問もあり、しっかり北大の魅力が伝わり、興味を持ってもらえたようです。また、PSU で毎週行われている、日本語を履修する学生と日本人留学生の交流イベントにも参加させていただき、日本語でしりとりをしたり、一緒に絵を描いたり、夕方まで楽しい時間を過ごしました。日本語でのしりとりを通して交流していた参加メンバーは、現地の学生が予想以上に難しい日本語を挙げたことに驚きを隠せない様子でした。英語の学習を始めて7年以上経つ参加メンバーにとっては、日本語の学習を始めてまだ1年程だという現地の学生の語彙力は焦りを覚えるほどでした。私は完璧な文法で話そうとするあまり、考えすぎてしまい言葉が出ない、ということがよくあるのですが、間違えても良いから声を出してみることの大切さを、この交流イベントを通じて再認識できました。この日は Mr.Braun に PSU の冊子とトートバッグを、Ms.Popp に PSU の冊子とカラビナをいただいたほか、学生交流の際にはお菓子と飲み物を用意していただきました。ありがとうございました。



学生交流の様子②

2日目は、PSU の講義を見学させていただきました。日本語の読み書き、ギリシャ史、社会学入門、政治学、古代哲学の5つのグループに分かれてアメリカの講義を体験しましたが、それぞれさまざまな発見があったようです。私は社会学入門に参加しましたが、日本の大学生にとって馴染みのあるような、教授が一方向的に話をする講義とは全く異なる形式のものでした。疑問があれば教授の説明を遮って質問したり、近くにいる学生と相談したりするなど、自由かつ活発に学生の意見が飛び交う様子を圧倒されました。講義の内容を理解するのも私にとっては非常に難しく、実際に留学して講義を受けるにはまだまだ英語力が不足していると実感しました。ランチをはさんで、PSU で留学生生活アドバイザーをしていらっしゃる Ms.Yoko Honda による、アメリカに留学すること、働くことについてのプレゼンテーションを拝聴しました。長期留学の際の気持ちの変化や悩みなどについてとても詳しく説明してくださったので、留学に対して漠然と抱えていた不安も解消され、今後さらに長期での留学に挑戦する勇気をいただいたように思います。また、実際に PSU に留学している日本人学生からお話を伺うこともでき、アメリカ留学に、より具体的なイメージを持つことができました。

(文責:三井和)

## シアトル若手勉強会 様

参加メンバー全員でシアトル若手勉強会様に参加させていただきました。シアトル若手勉強会様は、シアトルに留学中の日本人学生やシアトルで働かれている社会人の皆さんが集まり、毎月決まったテーマについての



話し合いを行っていらっしゃいます。シアトル地域でのお互いの活動を可視化し、学びの場とすることで、日本の成長、個人の成長に寄与することを目的としています(シアトル若手勉強会様の公式 Twitter より)。私たちが参加させていただいた回はアメリカでの食品の流通をテーマとして開催され、NICHIREI U.S.A, LLC 様の佐藤健夫社長にご講演いただきました。佐藤社長はアメリカ人の日本食品の消費の現状と今後の見解についてミレニアル世代に注目してお話をされていました。ミレニアル世代とは、米国で2000年代に成人あるいは社会人になる世代(ベビーブーマーの子世代)のことを言います。佐藤社長のご講演で今まで知らなかった食品業界の現状について知ることができただけでなく、講演の仕方についても学ばせていただきました。例えば、佐藤社長は最初は本題から入らずに、答えやすい質問を聴衆に投げかけてアイスブレイクを行い、次にご自身の自己紹介をされていました。自己紹介には名前や肩書だけではなく、佐藤社長のご趣味なども織り交ぜられていて面白く、とても惹きつけられました。そのあと、表やグラフなどのデータを示し、自然に本題に入るといった形をとられていました。私はこのような佐藤社長の非常にスムーズで聴衆を惹きつけるようなご講演の仕方に感動し、自分もこのような講演をできるようにたくさん勉強したいと思いました。



参加メンバーによるプレゼンテーションの様子

また、この勉強会では、「日本食品をアメリカに輸出する」をテーマに参加メンバーの代表がプレゼンテーションを行い、日本食品をアメリカに輸出し流通させるために工夫できることを提案させていただきました。その後はこのテーマに関して全体でディスカッションを行いました。「日本食品のアメリカへの輸出」と一言で言っても日本産の食材にこだわるのか・アメリカの食材で日本食を作るのかという点や、日本で加工するのか・アメリカで加工するのかという点など考えなければならない点はたくさんあります。他にも、アジア料理によく使われるうまみ調味料の主成分である「MSG＝グルタミン酸ナトリウム」は、多くのアメリカ人が健康に悪い成分として認識しているの

で輸出する際は気を付けなければならない、という国特有の事情なども考えなければならないことがわかり、とても勉強になりました。また、シアトル若手勉強会様には学生もいれば、様々なジャンルの企業に勤めていらっしゃる方々もいるので、経済・農業・文化など様々な観点から興味深い意見を伺うことができ非常に刺激的なディスカッションでした。今回、シアトル若手勉強会様に参加させていただいて自分の知識の少なさや視野の狭さを実感すると同時に、今まで私が触れる機会がなかった分野について少し知ることができたように感じました。社会は刻々と変化していて、次々出てくる課題を様々な視点から考え柔軟に解決していくことが必要であると学びました。

(文責: 三井智子)

## ポートランド日本語継承学校 様

ポートランド日本語継承学校様(以下 継承学校様 とする)は国際結婚家庭、永住者家庭環境など、家庭で日常日本語を使っている子供たちを対象にした学びの場となっており、毎週土曜日の午前中に幼稚園児～中学生までの子供たちが集まって日本語や日本文化について学んでいます(継承学校様のホームページより)。参加メンバーのうちボランティアを希望した 9 名で訪問させていただきました。継承学校様は年齢ごとに4つの



クラスに分かれているのですが、まず始めにそれぞれのクラスで折り紙でだまし船を作る活動のお手伝いや、日本のカップヌードルについてのプレゼンテーション、カタカナや漢字の学習のお手伝いをしました。朝の会ではなぞなぞを出したり、授業では漢字を学習することができるたを利用したりなど、子供たちがただ先生のお話を聞くのではなく、楽しく学べるように工夫されていました。

私が担当した2, 3年生のクラスではかるたで簡単な漢字やその成り立ちについて学んだあと、日本語のものの数え方について学習しました。小さな動物は「匹」、大きな動物は「頭」、お花は「輪」、本は「冊」、ペンは「本」など、日本語には様々なものの数え方があります。児童はその使い分けの違いを理解するのに大変苦労していて、私自身も教えるのが大変でした。私たちは普段何も意識せずに「1ぴき、2ひき、3ひき…」などものを数えています



K-1(5・6歳)クラスでの活動の様子



観光地ブースでの紹介の様子

が、それを一から理解して覚えるということは大変難しいことだと気づきました。

それぞれのクラスでの活動が終わると、全てのクラスの子供たちが集まって合同アクティビティを行いました。合同アクティビティとして、私たちは北海道のイベント、食、自然豊かな観光地、都市部の観光地について4つのブースに分かれて紹介しました。イベントブースではさっぽろ雪まつりとYOSAKOIソーラン祭りについて紹介し、紹介の最後には子供たちと一緒にソーラン節を少しだけ踊りました。食のブースでは北海道限定の美味しいお菓子などを紹介し試食もしてもらいました。観光地のブースでは写真などを見せて北海道の魅力を伝えました。幼稚園児から中学生まで幅広い年齢の子供たちに、わかりやすく説明するのは大変で

でしたが、問いかけをすると何人かの子供たちは元気よく答えてくれてとても楽しい時間でした。短い時間の中で児童がなついて抱きついたりしてくるのはとてもかわいかったです。私は海外で日本語を教えるということに興味があったので非常に良い経験となりました。

(文責: 三井智子)

## 7. 参加者の声

海外研修後に第22回FSP北米に参加した16名にとつたアンケートをもとに、参加者の声を一部抜粋し、まとめて紹介します。

### Q1.FSPに参加した目的

企業訪問などを通して、自分の将来について考えることなどを目的としたメンバーが最も多かったです。

以下大きく3つに分けて紹介します。

#### <今後の留学に向けた「ファーストステップ」として>

「留学をしたいが海外は初めてなのでその準備段階とすること」

「将来の海外留学に向けて、海外の大学や海外生活の雰囲気を知ること」

#### <「自分の将来」がキーワードの回答>

「自分の職業などの将来像を考える参考にすること・真剣に考える機会を得ること・視野を広げたいうえで将来について考えられるようにすること」

「講話者様方が現在の職に至るまで、どのような考えで進んでいったのかを知り、自分の将来についてのアイデアを得ること」

「このままでは流された人生を送ってしまうと感じたので、自分の人生設計を描くためのヒントを得ること」

#### <その他>

「グローバル人材とはどのような人のことを言うのか理解すること」

「外国の良さや日本の良さを知ること」

「自分と異なる価値観や文化に触れて刺激を受けること」

「英語圏で自分の英語力がどれだけ通用するか知ること・英語学習へのモチベーションとすること」

### Q2.参加して良かったこと・身についたこと

「英語学習に対する拒否感がなくなった」「英語をもっと勉強したいと思った」などといった英語学習に対する意見のほか、参加メンバーとのかかわりの中で何かを身につけたという人が多く、これは約2週間を集団で過ごすFSPだからこその結果だと思いました。

#### 「人前で質問をする能力」

人前で質問をする力が身についたと感じています。私は人前で挙手をしたり発言したりすることに恥ずかしさがあり、可能な限り人前で発言はしたくないと思っていましたが、他のメンバーが積極的に挙手し発言する姿を見て、質問に対する恥ずかしさは少しずつ取り払われ私もやってみたい、という気持ちになりました。すごくいい影響を受けたと思います。

#### 「人とのコミュニケーションへの積極性の向上」

人と積極的にコミュニケーションをとるようになりました。メールやラインでの連絡を始め、対面での会話など様々な場面でコミュニケーションをとり、自分から動けるようになりました。また、自分以外の人の考えを知り、意見交換したいと思うようになりました。考えの異なる様々な人達と関わることは面白いと感じられるようになったことで、人との関わりが自分の人生に重要であると気づきました。また、今回出会った人々との繋がりが、きっと自分の人生の支えになると感じています。

### 「固定観念が壊される経験」

- そもそも自分にこんなに「～はこうあるべき」といったような固定観念があるのだということ自体知らなかったのでびっくりしました。その固定観念の存在を知り、いかに自分の考えが狭いものだったのかということに驚きました。もっと広く物事を見ることができるのではないかと気づくことは日本にいてはできなかったような気がします。
- 自分の視野がいかに狭かったかということに気づきました。具体的には終身雇用制度が当たり前だと思っていたことや、授業では先生が一方向的に話すのが当たり前だと思っていたことなどです。

### 「仲間との出会い」

- ミーティングを通して将来のことを語る友人の話聞くことができ、自分も真剣に将来のことを考えるようになりました。
- 同じような志を持つ仲間を見つけられました。
- 良い刺激をお互いに与えることのできる仲間ができました。
- FSPメンバーと留学や、この先どういう道に進めばいいかなど同じ悩みを持つ仲間と仲良くなり、自分も頑張らなきゃなと触発される、かけがえのない経験をしました。
- 学部・学年が横断的であるため、相互的な学びが深かったように思います。普段の大学の講義では関わる機会のないような学生との意見交換は新鮮で、新たな気づきとなり良かったです。自分とは異なる意見に対して批判的に捉えるのではなく、尊重して相手の考えをより深く理解する意識が身につきました。

## Q3.参加して実際に自分のキャリア形成、セカンドステップ(短期留学、長期留学、進路選択など)に向けて有益だったこと

実際に留学している方、働いている方からお話を聞くことで国内外にかかわらず「働く」ということについて具体的なイメージが出来るようになったという意見のほかにも、自分の人生に対する向き合い方・考え方が前向きに変化した人が多かったようです。

### <一部抜粋>

- 企業訪問でいろんなお話を伺う中で、失敗しても何度もやり直せるということ、日本にある「大学卒業→就職」という一般的な社会人への道のり以外の人生もあるのだということを知りました。
- 海外で活躍なさっている方のご講話はいままでの固定観念から抜け様々な視点から物事を見ることの大切さや、大学生の内に将来に向けた努力をしなければならぬと強く心に残る素晴らしいもので、1年間ぼんやり過ごしてきた自分の行いを反省できました。
- 自分の考えていた職業よりもっと多くの道が自分の前に広がっているということを感じることができました。
- 自分でも気づかないうちに「一度入った会社には首にならない限り一生勤めることになるのだろう、転職も何か引け目を感じるし。」と思っていた自分にも気づかされ、転職も自分の人生を明るくする立派な選択肢

なのだから、変に気負うことなく仕事を選ぶぞという気持ちになれました。

- ・ 企業の方、留学している方からお話が聞けて、こんな生き方、こんな方法で海外と関われるのだ、と目から鱗なことが多かったです。

#### Q4-1. FSP 北米に参加するにあたり、アメリカそのものについて参加前に自分の抱いていた印象

治安悪い/自由/他人に無関心/移民に厳しい/なんでも大きい/日本人に対しては反日の感情を抱いている人が多い/人口密集している/混みあっている/コーヒーショップたくさんある/多国籍/広い/学生の意識が高い/自分のために生きている/怖い/美味しくない/フレンドリー

#### Q4-2. FSP 北米に参加して変わった点

フレンドリー/親日の人も多い/優しい(向こうの人から話しかけてきて助けてくれる)/思ったほど治安悪くない/危険とおもわれる場所を通らないことや貴重品を見せびらかしたりしないようにすることは日本にいますときよりも注意しなくてはならないが、総じてそれほど危険な国ではない/フレンドリーでない人もいる

※各個人が回答したものなので、「フレンドリー」などは4-1と4-2どちらにも登場します。

#### Q5. 事前・事後授業を含む FSP の全活動を通して印象に残っていること、感想

- ・ 現地の学生とコミュニケーションをとっている時間は、日本では経験できない貴重なもので、とても楽しい時間でした。
- ・ 一緒に活動をしていても、メンバーそれぞれが感じること、学ぶことは全然違って、それをシェアするのが楽しかったです。それも異文化理解のひとつなのだろうと思いました。
- ・ 様々な考えを持った仲間と海外に行き、企業訪問や協定校訪問を通して色々な方のお話を聞いたり、メンバーそれぞれの考えを共有したりすることで自分の考えの幅が広がったことがよかったです。
- ・ 海外に行くということがこんなにも新鮮で刺激的で、普段の学生生活とは違うことができるものだということに驚きました。新しい自分になった気がして、今までしなかったようなことに挑戦しようという気持ちになりました。本当に14日間楽しくて、もう一度1日目からやり直したいという気持ちすらあります。学部・文理・学年も違う16人でしたが、どこか似ているところがあったからこそこうして集まってFSP北米に参加しているのだと思うし、一緒に頑張ることができたことをすごく貴重な経験だと思っています。
- ・ 食事の量が多かったです。私は朝ごはんからたくさん食べることができると渡米前は思っていたのですが、実際にアメリカの朝ごはんを前にするとその量に圧倒され、胃もたれと満腹感に驚かされました。
- ・ 始めは参加メンバーとあまり仲良くなくて準備も少し面倒だったけど、だんだん仲良くなって何でも語り合えるようになるので準備の大変さ以上にとても楽しいプログラムでした。



## 8. 終わりに

第22回FSP北米全体報告書を最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

引率いただいた方々、訪問先の方々、北海道大学教職員の皆様、そしてご父兄の皆様に支えていただき、第22回FSP北米参加メンバーは全日程を無事に修了し、帰国することができました。改めて感謝申し上げます。

アメリカでの研修は、参加メンバーにとってとても有意義なものになりました。学部も学年も異なる、FSPならではの仲間との出会い。初めて受けたカルチャーショックと、自分自身が外国人になるという経験。そして、アメリカで活躍される皆様によるご講話。研修中に経験したあらゆることから学ぶことができました。

さて、参加メンバーはすでにセカンドステップへ向けて動き始めています。今回の海外研修で得たもの、芽生えた気持ち、熱意を大切に抱きしめて、次なる一步を踏み出したいと考えています。

(文責:三井和)

## 9. 謝辞

ご多忙中にもかかわらずご講話くださった皆様、訪問を受け入れてくださった協定大学の教職員の方々、交流してくださった学生の皆様に、心よりお礼申し上げます。

そして、海外研修全行程で引率をくださった国際連携機構 石倉香理さん、シアトル滞在期間中の引率をくださった国際部国際交流課 係長 角家由紀子さん、ポートランド滞在期間中の引率をくださった文学研究院准教授 ミシェル・ラフェイ先生、事前・事後授業や成績評価をご担当いただいた国際連携機構 国際教育研究センター 肖蘭先生をはじめ、このプログラムの運営に携わっていただいた北海道大学 教職員の皆様に、厚く感謝申し上げます。

最後に、海外研修へ送り出してくださったご父兄の皆様、支えあい、刺激しあった参加メンバーの皆さん、本当にありがとうございました。

2018年4月25日

第22回FSP北米 記録広報班一同

## 10. 編集後記

第 22 回 FSP 北米で海外で働く方々のお話を聞いたり、今までしたことのない様々な経験をしたりして、これまでやこれからの自分自身の考え方や生き方についてたくさん考えさせられました。たくさん経験や情報を得ても、それらをきちんと整理して自分の中で解釈し考察しなければ行動に移すことはできません。私にとって、記録広報班として報告書にまとめたり、みんなで話し合ったりすることがそれらを整理することにつながりました。何かたくさんを学んだつもりで帰ってきても、それらをきちんと言葉で表現することはとても難しかったです。みなさんに私たちがこのプログラムで何を学んだのか、どう感じたのか、少しでも伝わっていればと思います。最後までお読みいただきありがとうございました。

(三井智子)

この全体報告書を書くにあたって、第 22 回 FSP 北米について多くのことを振り返り、自分なりに整理できたことをとても嬉しく思っています。研修中に学んだこと、FSP で得られたものは何かなど、記録広報班として班員と話し合いを重ね、意見交換をする機会が他メンバーよりも多く得られたことは、恵まれた環境であったと実感しています。この FSP で学んだことは今後の大学生活をいかに過ごしていくか、そして大学卒業後にどのようなことをしていきたいかということに非常に役に立つものばかりでした。これからは自分のセカンドステップに向けて、FSP で経験したことを十分に活かして努力していきたいと思います。

この報告書を読んで、少しでも FSP について興味を持ち、参加したいと思っていただければ幸いです。ここまで目を通していただきありがとうございました。

(井上夏緒)

第 22 回 FSP 北米 全体報告書を最後まで読み進めていただき、ありがとうございます。この報告書の執筆にあたり、記録広報班のメンバーと一緒に FSP の活動を振り返り、アメリカでの経験や、留学やキャリアに対するそれぞれの考えを共有する機会を何度も得ることができました。その中で新たな発見があったり、自分にはなかった視点に気がついたり、帰国してからも学ぶことは多くあり、とても充実した春休みを過ごすことができたように思います。

さて、私が FSP への参加を決めたきっかけのひとつは、2016 年度春季、2017 年度夏季プログラムの帰国報告会に参加したことでした。FSP での経験、得た学びをプレゼンテーションする先輩方のきらきらした笑顔に憧れを抱き、報告書を読み返しました。FSP を終えた現在、自分自身がそのような姿を見せることができているかわかりませんが、この報告書がファーストステップを踏み出す後押しをする存在となれば幸いです。

(三井和)

最後まで目を通していただき、ありがとうございました。

記録広報班は海外研修後、主にこの全体報告書と帰国報告会のプレゼンテーションの作成を担当させていただきました。海外研修中に感じたこと、学んだことは一つ二つと数え切れるほどのものではなく、それらをまとめて一つに仕上げるといふ作業はとても難しいものでしたが、この全体報告書を通して、私たちが経験した「第22回FSP北米」というものが少しでも読者の皆様に伝わったならば、嬉しく思います。

今回、企業等訪問のご講話で「わくわくすることをやってみると良い」ということをお話しして下さった方がいらっしゃいました。私自身、最終的にこのプログラムに参加しようと決めた理由は「わくわくする」と感じたからです。海外研修を終えた今、振り返ってみると、このプログラムを知った時の「わくわく」を信じてよかったな、と思います。今回、この全体報告書を読んで、少しでも面白そうだな、参加してみたいかもしれない、と「わくわく」を感じた方には、ぜひFSPに参加することをお勧めします。きっと想像もしなかった体験や仲間との出会いがそこに待っているでしょう。また、ファーストステップを終えて、セカンドステップに向かおうとしている皆さん、この全体報告書を読んで、少しでも当時感じたことが胸によみがえったでしょうか。この全体報告書がセカンドステップへの後押し的一端を担うことができたならば幸いです。

最後になりますが、第22回FSP北米でお世話になった方々、参加メンバーの皆さんに改めて御礼申し上げます。今後ともご指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願ひいたします。

そしてファーストステップへ踏み出そうとされている方、次はあなたの番です。この全体報告書が今後FSPに参加される方のお役に立てることを、班員一同願っております。

(記録広報班班長 百崎恭佳)





第22回 FSP 北米 全体報告書  
2018年4月25日

編集

第22回 FSP 北米 記録広報班  
(全体報告書担当:三井智子 井上夏緒 三井和)  
(プレゼンテーション担当:百崎恭佳 馬場佐織 庄司明日美)

問い合わせ先

北海道大学国際連携機構 国際オフィサー室 (国際交流課)  
電話:(011)706-8040/8032

E-mail: [ambitious@oia.hokudai.ac.jp](mailto:ambitious@oia.hokudai.ac.jp)

Website: [https://www.oia.hokudai.ac.jp/be\\_global/](https://www.oia.hokudai.ac.jp/be_global/)

Facebook: <https://www.facebook.com/1ststepprogram>

Twitter: [https://twitter.com/fsp\\_hokudai](https://twitter.com/fsp_hokudai)

Instagram: [http://instagram.com/fsp2017\\_spring](http://instagram.com/fsp2017_spring)